

# 長崎大学医学部創立150周年

伝統と誇りを受け継ぎ、医学のさらなる発展へ



【養生所】(ボンベ著「日本における五年間」の口絵)

1861年9月、長崎大学医学部の前身である「養生所」が完成。良順が頭取、ボンベが教頭に就任した。その隣に医学所(医学校)が隣接。日本で初の近代西洋医学教育病院となった。



【松本良順(1832~1907)】  
(長崎大学附属図書館所蔵)

ボンベに蘭学を学び、後に明治政府の初代軍医総監となった。



【ボンペ(1829~1908)】  
(長崎大学附属図書館所蔵)

長崎大学医学部の創設者。「近代西洋医学の父」と呼ばれている。



【大正時代の講義風景】

(長崎大学附属図書館所蔵「卒業アルバム」より)



【ボンベ・良順と学生の集合写真】

(長崎大学附属図書館所蔵)

前列右がボンベ、左に松本良順が座っている。

当時のオランダ軍医ボンベ・ファン・メルデルフ・フォルトが、松本良順以下12人の日本人に、長崎奉行所内の医学伝習所で西洋医学教育を開始。11月12日、この日が日本における西洋医学教育の始まりであり、長崎大学医学部の創立記念日となった。

1901	1878	1874	1871	1868	1865	1862	1861	1857
明治34年	明治11年	明治7年	明治4年	明治元年	慶応元年	文久2年	文久元年	安政4年

1901 長崎医学専門学校設置  
(第五高等学校医学科の変遷)

1878 長崎医学校再興  
(吉田健康が再興)  
●88年、第五高等学校医学科に  
●94年、第五高等学校医学科に

1874 長崎医学校廃止

1871 長崎医学校設置  
(長崎府医学校の変遷)

1868 長崎府医学校設置  
(精得館の変遷)

1865 精得館設置  
(養生所・医学科の変遷)

1862 ボンベの後任として  
ボードインが養生所教頭就任

1861 養生所・医学科設置

1857 医学伝習所にてボンベが  
西洋医学教育開始



【人体解剖模型・キュンストレーキ】  
(長崎大学附属図書館所蔵)

ボンベが解剖学講義に使用した紙製解剖模型。1945年8月9日原爆投下時、焼失せずに奇跡的に助かったが、傷みは激しい。

いったん廃止された長崎医学校は吉田健康によつて再興。1892年には建物も現在医学部のある坂本に新築移転した。

江戸で医学を学び、その後長崎の精得館の長にもなった相良知安は、当時最も進歩していたドイツ医学の採用を主張。その後、明治政府はオランダ医学に代わりドイツ医学を採用した。政府は台湾出兵にあたり長崎医学校を廃止。学校附設の「長崎病院」を兵員病院とした。



【長与専斎(1838~1902)】  
(『松香遺稿』より)

長与専斎はボンベとボードインに学び、1868年に精得館頭取、1875年に内務省衛生局長となり、日本の衛生行政に貢献。



【ボードイン(1820~1885)】  
(長崎大学附属図書館所蔵)

ボンベの師、アントニウス・ボードインは特に眼科を得意としており、日本に検眼鏡を最初にもたらした。

国内初の西洋医学教育が長崎大学医学部の前身である長崎医学伝習所で行われてから150年。以来、がんや心臓病・脳卒中の治療や再生医療など、日本の医学はめざましく進歩しています。今回は、西洋医学の発祥とともに誕生から150周年を迎えた長崎大学医学部を紹介します。



**【被爆直後の長崎医科大学附属医院】**

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原研提供)

浜口町南東部及び岩川町北東部付近からみた長崎医科大学附属医院全景。



**【斎藤茂吉(1882~1953)】**

(長崎大学附属図書館所蔵『卒業アルバム』より)

1917年に長崎医学専門学校精神病学教授となる。1921年欧州留学に出发するまでの約4年間その教授を務めた。



**【相良知安(1836~1906)】**

(『東京帝国大学50年史』より)

ボードインの弟子で、精得館の医師頭取。その後、文部省医務局長などを務め、ドイツ医学を日本で採用した。



**【被爆直後の長崎医科大学基礎キャンパス】**

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原研提供)

1945年8月9日午前11時2分、長崎医科大学から700メートル離れた浦上上空で炸裂した原子爆弾は、一瞬にして医科大学の校舎、多くの附属医院病棟を破壊炎上させ、ほとんどすべての資料や設備を失わせた。教職員、看護婦、学生約890人が犠牲となった。

基礎キャンパスの多くの講義棟は木造であり、講義を受けていた学生たちは、瞬時に熱線で焼かれ、教授の遺骨の前に、学生の遺骨が整然と並んでいた。鉄筋コンクリート造であった附属医院の中では5割の人は生存できたが、基礎キャンパスでの生存者は12人に過ぎなかった。

2007 平成19年 | 2002 平成14年 | 2001 平成13年 | 1962 昭和37年 | 1955 昭和30年 | 1949 昭和24年 | 1945 昭和20年 | 1942 昭和17年 | 1940 昭和15年 | 1923 大正12年

- 2007 医学部創立150周年
- 2002 「大学院医歯薬学総合研究科」設置
- 2001 「医学部保健学科」設置
- 1962 「原爆後障害医療研究施設」設置
- 1955 「大学院医学研究科」設置
- 1949 「長崎大学医学部」設置
- 1945 長崎医科大学・附属医院壊滅状態
- 1942 「附属東亜風土病研究所」設置 (現熱帯医学研究所の前身)
- 1940 「臨時附属医学専門部」併置 4年後「附属医学専門部」と改称
- 1923 「長崎医科大学」設置 (長崎医学専門学校の昇格による名称変更)



長崎大学医学部・歯学部附属病院新病棟



**【永井 隆(1908~1951)】**

(永井隆記念館より)

放射線医として長期にわたる放射線被ばくで、白血病になるが、原子爆弾投下直後より救護班を組織し、被爆者の救護にあたった。

当時の第11医療隊長の永井隆助教授は、被爆後、行った診療の詳細な記録「原子爆弾救護報告」を残している。原爆による外傷、熱傷、そして急性原爆症の医学的な記録で、原爆の医学的被害記録の原点といえるべきものになっている。1946年に長崎医科大学教授に就任。その後、白血病で病床に伏しながら「長崎の鐘」や「この子を残して」などを執筆した。

**【長崎大学医学部・歯学部附属病院新病棟】**

医学部創立150周年と時を同じくして、現在新しい病棟の建設が進んでいる。今年6月に開院予定。

記念式典・記念講演



「プリオンと神経変性病」について講演を行う  
スタンレー・プルシナー氏  
(カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部教授)



「幕末期の日本と洋学～開国における国際法の  
受容を中心として～」の講演を行う  
小和田恒氏(国際司法裁判所判事)



記念式典の様子

2007年11月10日、長崎大学医学部記念講堂にて、「西洋医学教育発祥150年・長崎大学医学部創立150周年合同記念式典」を開催しました。関係者約500人が参加した式典では、文部科学大臣政務官や在日オランダ大使等から祝辞をいただきました。その後行われた講演会では、ノーベル生理学・医学賞受賞者であるスタンレー・プルシナー氏(カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部教授)、小和田恒氏(国際司法裁判所判事)による記念講演が行われました。

プルシナー氏は、ヒトや動物に神経変性疾患(クロイツフェルト・ヤコブ病)を引き起こすプリオン(感染能を持つタンパク質因子)について講演。プリオンの発見から今後行われる研究により、長年効果的な治療法が発見されていない神経変性疾患の治療法に大きな期待が持てることを述べられました。

また、小和田氏は、鎖国時代に行われた日蘭両国の交流が、日本のさまざまな学術発展に大きな役割を果たしたことを中心に、幕末期の日本の近代法律学の発展と、国際法について講演をされました。

両講演は、医療技術の進歩や医学界に数多く存在する問題点に触れ、関係者をはじめ、出席した教員や学生など熱心に耳を傾けていました。

「良順会館」竣工



国際会議場「ボードインホール」

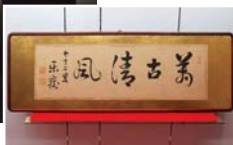


2007年12月17日、医学部キャンパス内に「良順会館」が誕生しました。ここでは、医学部が行う各種講演会やシンポジウムをはじめとし、各種講義なども行われます。この会館は、1857年(安政4年)、長崎奉行所内の医学伝習所において、オランダ軍医であったボンペから日本人として初めて西洋医学教育を受けた松本良順の名にちなんで「良順会館」と名付けられました。ここに足を運ぶ医学部生が、長崎で西洋医学を学び、医学の普及活動で貢献した良順のように、医学をもってさまざまな場所で活躍できる人材になるようにという願いも込められています。

また、良順会館内には215人収容できる国際会議場や、医学部の変遷に関する史料を集めたミュージアム(一般公開)も設けられています。



ミュージアム



松本良順直筆の書

# 医学部生による「医学展」開催

3年に1度開催される長崎大学医学部生による「医学展」が創立記念にあわせて開催されました。この企画は一般市民の方に医学部生が日頃学んでいることや感じていることを知ってもらおうと開催されているもので、今回も多くの市民の方が医学展を訪れました。

医学部  
全学年

慰霊碑の丘を  
虞美人草でいっぱい

「グビロが丘」再生プロジェクト



「グビロが丘」を訪れ、慰霊碑に手をあわせる卒業生ら。



慰霊碑のある医学部裏手の小高い丘「グビロが丘」に現役医学部生と虞美人草の種を蒔く卒業生ら。



「グビロが丘再生プロジェクト」を企画した  
医学部5年 田口 正剛さん

原爆後、かろうじて生き残った学生や教員たちが助けを求めて登ったとされる「グビロが丘」。ここには、当時この場所で亡くなった方々の遺骨が葬られ、慰霊碑が建てられています。志半ばで亡くなった先輩方へ追悼の意を表すため、現医学部生が「グビロが丘」再生プロジェクトを企画。当時、虞美人草（ヒナゲシ）の花で覆われていたという「グビロが丘」をもう一度甦らせようとする準備を進めてきました。初夏に満開の花で覆われた「グビロが丘」が見られるよう、今後、医学部生によりこの丘の手入れが続けられます。



遺骨を拾って最初の慰霊碑を作った当時の様子を語る 濱里 欣一郎さん

3年生  
主催

医療機関で行われる健康診断を実施

TRY!健康診断



5年生  
主催

医学部生がAED装置の使い方を伝授

一次救命処置・AED



医学部  
全学年

熱帯医学研究所がある長崎大学ならではの企画

寄生虫展

海外はもちろん、身近に潜む寄生虫の生態を公開。顕微鏡で見る寄生虫の姿に驚きの声も!



「医学展」実行委員  
医学部5年 伊達 有作さん

4年生  
主催

手術で使われる機器を導入して手術室を再現

疑似医療体験



実際にモニターを見ながら、手術で使われる道具や機器を、さわったり動かしたりできる企画に訪れた高校生も興味津々。

医学部の  
これから

# 患者本位で 地域医療に貢献

1857年11月12日、徳川幕府から招かれたオランダ軍医ポンペ・ファン・メルデルフオールトが、長崎奉行所西役所の医学伝習所で松本良順以下12人の日本人に体系的な西洋医学教育を始めました。この日が我が国の近代西洋医学発祥の日であると同時に長崎大学医学部の開学の時でもあります。この150年の間に、長崎大学医学部は営々としてわが国の医学、医療の発展に貢献し、一方で、世界で唯一の原子爆弾の被爆経験を有する医学部として多くの先輩方の尊い命を失った悲しい歴史も経験しました。2007年11月に長崎大学医学部は創立150周年を迎えましたが、開学の祖であるポンペ・ファン・メルデルフオールトは、次の言葉を残しています。

「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものでなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい。」

本学部は、この言葉を建学の基本理念として、「医学を学ぶ」、「科学を学ぶ」、



医学部長  
**河野 茂**  
Kohno Shigeru

「人間を学ぶ」を重視した教育を実施し、深い医学知識と豊かな創造性、高い倫理観を身につけた医師及び医学者を育成することを目標としています。

また、地域医療に貢献するとともに、世界に向けて最先端の医療情報を発信して行こうと考えています。同時に、医学を通して平和の実現のためにも弛まない努力を続けていきます。



長崎大学医学部基礎棟  
世界に向けた最先端の医療情報を発信し続けている。

## 長崎大学医学部が取り組む3つの柱での人材育成

### 学生の教育

医師となるには、学識と技術、真実をみつめる眼とともに、病める人々を理解する深い人間性が必要です。私たちは、「医学を学ぶ」、「科学を学ぶ」、「人間を学ぶ」ことを目標とした長崎大学医学部ならではのプログラムを提供しています。(左図参照)

特に4年間を通して行われる「医と社会」に関する講義、3年次のリサーチセミナー、そして長崎大学医学部の最大の目玉で5、6年次に行われる離島医療実習では、地域密着型の医療を経験します。また、アジアやアフリカ、オランダ、ドイツの医科大学、研究所における短期留学プログラムを準備し、国際的な医師、医学者の育成も目指しています。

### 地域医療

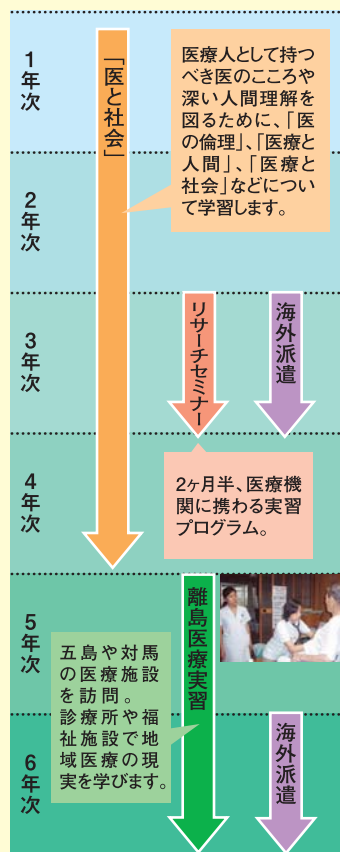
地域医療に貢献する医師を育成するためには、単に医学知識や医療技術に関する教育に止まらず、実際に患者や地域社会と触れ合い、コミュニケーション能力を育む

ような教育が極めて重要です。長崎大学医学部では医学生が離島に滞在して保健・医療・福祉施設の現場で学ぶ、全国でも例のない教育プログラムを取り入れ、心の通った医師を育成する最先端の取り組みが行われています。

### 放射線科学と国際貢献

長年にわたる原爆被爆者への医療貢献と医学研究の成果は、60余年経過しても晩発性の各種疾患が多発していることを明示しています。21世紀COEプログラムや、平成19年度から取り組んでいるグローバルCOEプログラム(CHOHO21号参照)では、新たな道を開拓しつつあります。原子力の時代であればこそ、個人の安心と安全を守るために、社会に開かれた学問体系を構築し、国際放射線保健医療、原爆医療、そして放射線基礎生命科学の各研究プロジェクトを推進しながら、放射線による健康リスクを正しく評価・管理し、そしてコミュニケーションできる人材育成が始まっています。

### 長崎大学医学部生が卒業までに 取り組むカリキュラム(一部紹介)



# 「医一療の一現一場」からレポート

## 島・島民から学ぶ医療

大学院医歯薬学  
総合研究科  
**前田 隆浩** 教授  
Maeda Takahiro



日本は数多くの島々からなる島国ですが、600余の離島を有する長崎県には、実に55の有人離島があり、県土の約4割を占める離島に県総人口の10.6%にあたる約15万6千人が暮らしています。離島というと、過疎や医師不足などとかくマイナスのイメージで取り上げられることが多いのですが、豊かな自然と美しい、温かい住民気質といい、離島ならではの魅力が沢山あります。平成5年4月から約3年間、五島市にある五島中央病院で勤務した際には、こうした離島の良さを充分満喫させてもらい、その経験を買われて

今度は離島医療研究所の所長として五島に舞い戻ってきました。

長崎県の離島では、地域中核病院を中心とした完結型の医療を目指した取り組みがなされており、さらには離島の医療機関と本土の支援病院とが連携した広域医療ネットワークが極めて有機的に機能しています。しかしながら、住民の医療に対する不安は依然として大きく、実際に働いてみると、離島医療に従事している医師やそれを支援する大学医学部に向けた島民の切実な思いを感じます。こうした住民の期待に直に伝えることができる点、離島での診療は大変やり甲斐のある仕事



離島では診療所での診察だけでなく、患者とゆっくり散歩をしたり、雑誌などを通して、患者のトータルケアも行われている。

だと思えます。

長崎大学医学部では、地域医療を教育する先進的な取り組みとして、医学部5年生全員が離島に滞在して保健・医療福祉の現場で学ぶ、全国でも例のない教育プログラムを平成16年より取り入れています。実際に離島での地域医療に接するこの経験は、自分の将来や求める医師像を考える上で大きな示唆を与えてくれるに違いありません。

高度先進医療に挑む医師や生命科学研究に専念する医師、そして地域医療を担う臨床医など様々な医師がいて、それぞれに社会から大きな期待が寄せられています。どの道を選択するにしても、ポンペ先生の言葉「医師は自分自身のものではなく、病める人のものである」の通り、患者の切実な願いに応える大切な使命を胸に、選んだ分野に専心して取り組んでもらいたいと思います。そして、離島やへき地など、医療に恵まれない地域の医療活動を通して、その問題解決に信念を持って挑む医師が一人でも多く誕生してくれることを期待しています。



▲患者と家族のように接しながら進められる島の医療活動。実習では、専門医と治療方針を決める遠隔システムや本土で緊急手術がある場合のヘリコプター搬送なども体験する。

◀小離島への定期的な巡回診療に同行し、へき地医療の実際を学ぶ。

